

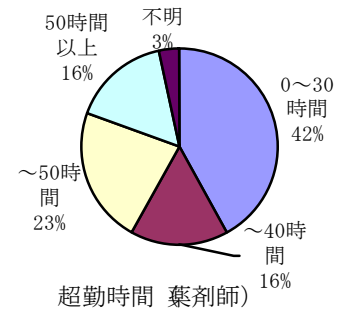
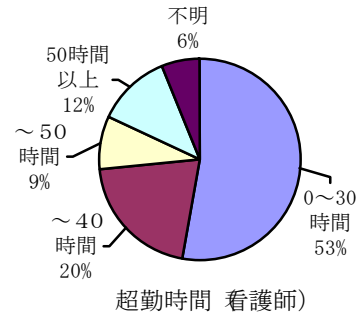
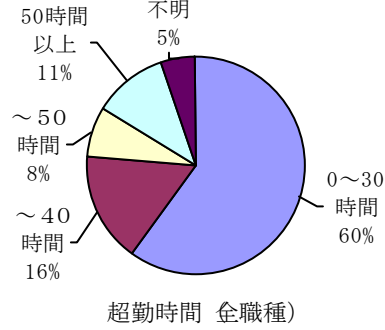
— 北大病院職員の現状 —

北海道大学教職員組合病院班

全国大学高専教職員組合病院協議会では、2004年10月に法人後の労働条件改善を目指すアンケート調査を実施しました。勤務時間などの実態は同年9月の状況、年休は2003年の取得状況で調査しました。北大教職員組合病院班では北大病院に勤務する職員999名を対象に行い、510名から回答をいただきました(回収率51.1%)。ご協力ありがとうございました。アンケート結果の中から、今回は超勤問題、看護師の夜勤、年休取得、体調・疲れ具合に絞り、全職種と中でも特に目立った職種を抜粋して報告いたします。

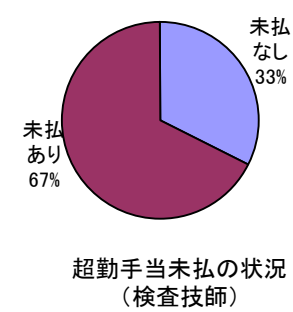
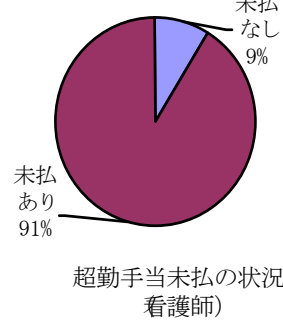
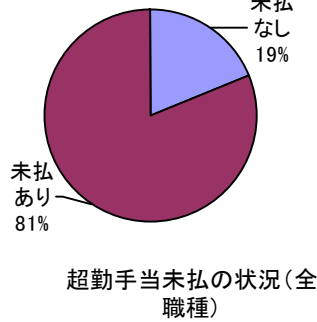
1、超過勤務時間について

1ヶ月30時間以上行っていたのは510名中181名(35%)、このうち労使協定の1ヶ月45時間を越える50時間以上行っていたのは58名(11%)でした。職種別では、看護師333名中、30時間以上137(41%)、このうち50時間以上40名(12%)、薬剤師31名中30時間以上17名(55%)、このうち50時間以上は5名(16%)でした。



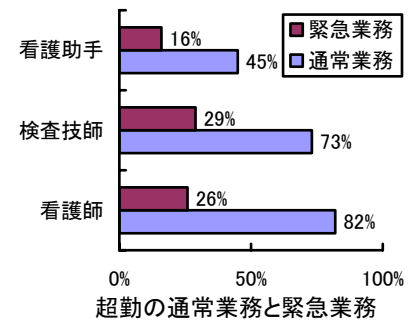
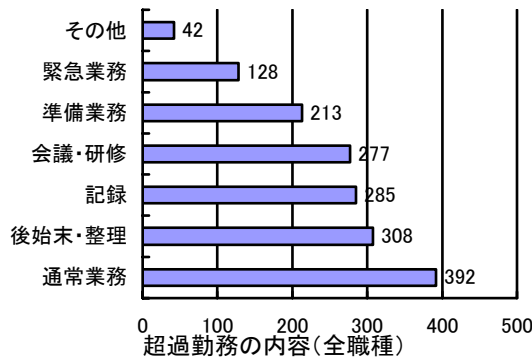
2、超勤の未払いの有無について

超過勤務の未払いの時間数について回答した402名中、未払いがあったのは326名(81%)、未払いがなかったのは76名(19%)にすぎませんでした。職種別では未払いが多かったのは看護師で、回答者235名中214名(91%)で、未払いがなかったのは21名(9%)、検査技師は回答者43名中29名(67%)で未払いがなかったのは14名(33%)でした。



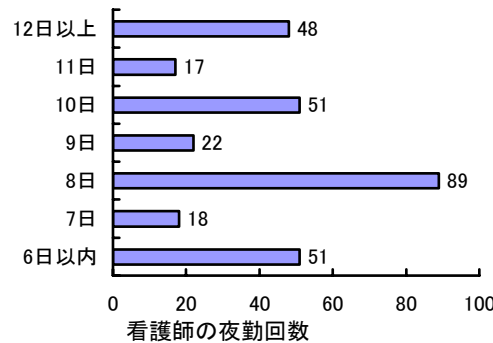
3、超過勤務の内容

複数回答で510名中最も多かったのは、通常業務392名(77%)、次いで後始末・整理業務308名(60%)、記録285名(56%)、準備業務213名(42%)、義務的会議・研修277名(54%)でした。本来の超過勤務の対象である緊急業務は128名(25%)にすぎませんでした。一部の職種ごとに通常業務と緊急業務の割合をみても、通常業務の割合が多く、上記に示した超勤時間との関連から見ても、恒常的な超勤を裏付けている結果でした。



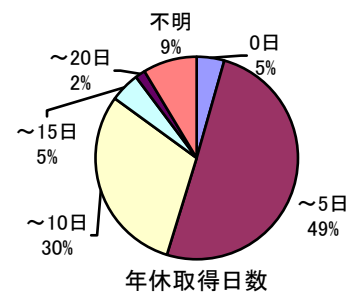
4、看護師の夜勤回数

法人前、看護師の夜勤回数は人事院判定で月8日以内と決められていました。しかし、回答者の夜勤対象者296名中、8日以内は158名(53%)と約半数にすぎず、9日以上が138名(47%)、このうち10日以上は116名(39%)もいました。生体リズムの変化による健康破壊をなくすためには、組合は月6日以内(労働日の1/4)を要求してきました。しかし、6日以内は51名(17%)にすぎませんでした。



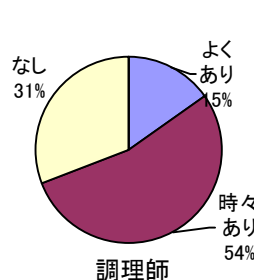
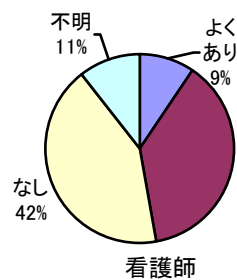
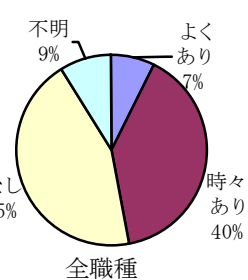
5、年休取得

年休が取れるだけの人員がないため、年休取得10日以内が434名(85%)、このうち1日も取れなかった人は23名もいました。中でも看護師の職場は、最低の業務に見合う日勤者・夜勤者を確保するのがやっとなので、年休はお正月と夏の特別休暇と合わせて、勤務表に組まなければ取れない状況です。



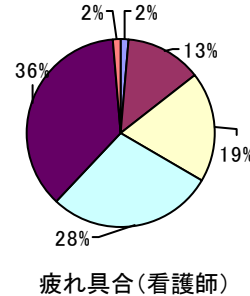
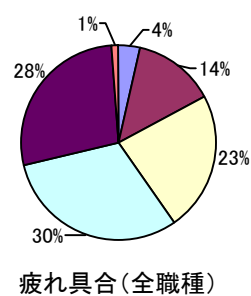
6、「発熱や体調不良でも休めず勤務したことは？」

よくあった「時々あった」を合わせると、発熱や体調不良でも休めず勤務せざるを得なかった人は、239名(47%)でした。特に目立った職種をみても、体調不良のまま勤務を行ったのは半数からそれ以上もありました。



7、疲れ具合

起床後も疲れが残る「いつも疲れている」を合わせると298名(58%)と半数以上でした。職種別でみると、看護師は217名(65%)と多く、又、少ない職種の中でも栄養士と臨床工学士は回答した全員が「起床後も疲れが残る」「いつも疲れている」と答えており、北大病院で働く職員の多くが、疲れが回復しないまま勤務している状況がわかりました。



以上の結果から、北大病院の職員の過酷な勤務実態が明らかになりました。このままの状態では、医療事故や過労死を招く原因となります。組合は、今回のアンケートの結果を貴重な資料として活用し、職場の改善に努めます。皆さんの力も必要です。職場を改善し、より良い医療を提供していけるよう一人でも多くの方たちが組合に加入することを期待しています。